疾患モデル通信　2005・10　NO. 21

タンザニア── 17 年の変化

就実大学薬学部　奈良安雄

タンザニアを疫学調査のために初めて訪れたのは 18 年前の 1987 年の夏であった。タンザニアは東アフリカに属し、ケニアの南側に位置する。赤道近くに位置するため、日本の様な四季はなく、一年を通じて気温はほぼ一定で、雨季と乾季が交互に到来する。赤道に近いため、海岸付近の気温は高いが、大部分の国土は海抜 1000～2000m と高地であり、ケニアとの国境付近には標高約 5900m のキリマンジャロ山がある。タンザニアは我々が一般に持っているアフリカのイメージ、不毛、貧困、飢餓とは少し異なっている。即ち、この国は本来色々の農作物が獲れる豊かな国である。

最初にダルエスサラームの町に着いたとき、車の量はそれほど多くはないにも拘わらず、立派な道路が走っていた。それらの道路は各国からの援助で施設された物であるので、信号機に統一性が無く、援助した国の信号機が付いていた。例えば、日本製の横型で右折表示のある道路を少し走ると全く異なる縦型の信号機に出くわすという様な具合である。アスファルトの道路は安全であると思われがちだが基礎工事をおざなりにした場合かえって危険である。雨期になると大量の雨が降るため基礎工事の悪い道路ではアスファルトの下の土が流失してもなまじアスファルトが表面を覆っているため、表面上は正常な道路に見える。しかし、その上を車が通ると突然陥没して車が横転する場合がある。舗装していない一般道には至る所に大きな穴ができており、その穴をよけて車を運転するのは至難の業である。レンタカーは基本的に運転手つきで、彼らは瞬時に道路上の穴の深さを判断し、一番良いコースを通って行くことが出来る。

町の中でこそ道路は舗装されているが、一歩町から出ると悪路が延々と続いていた。次の調査地のハンデニに行く道路も悪路の連続で、しっかり車の中の取っ手を握っていないと天井に頭をぶつける状態で、約 200 キロの距離を朝に出発してやっと夕方に到着するというのろのろ運転であった。途中にはタンクローリー車が横転したまま放置されている場所に度々出くわした。当時の経済状態を今調べ直してみると、 アフリカ型の社会主義政策が失敗し、経済が一番疲弊している状態であったようである。

当地では我々が利用出来る宿泊施設がなかったので、女学校の寄宿舎を利用させて貰った。この地で一番苦労したことは水が調理用の物しか無く、シャワーはもちろんのこと手洗いの水もなかったことである。電灯線は来ているが供給が悪く、しばしば停電していた。検診場所はここから車で 1～2 時間の所なので、朝食を済ませた後出かけていき夕方返ってくることの繰り返しであった。また、検診に必要な器具類も盗難の心配があるため検診場所においておく訳にいず、毎日トラックへの積み降ろしを繰り返した。検診場所として診療所を利用させて貰ったが、診療所とは名ばかりで、電気の供給は勿論なく、薬品類も一切見あたらなかった。

○目次

巻 頭 言……P1
総会報告……P3

ハンデニ地区での検診の後はマサイ族を調査するためケニアとの国境近くまで北上した。当初はマサイ族が住んでいる近くのバンガロに宿泊する予定であった。しかし、口に合わない昼抜きの一日二回の食事、毎日のトラックへの機材の積み降ろしや水不足による手洗いやシャワーが出来ないことによるストレス等ハンデニでの検診で我々は疲労困憊していた。

そこで予定を変更して検診場所からは離れているがアルーシャ（海抜約 1400m）のホテルに宿泊することにした。アルーシャは近くにキリマンジャロ山、セレンゲティー国立公園やンゴロンゴロ自然保護区がある一大観光地であるため外国から多くの観光客が訪れる場所である。

宿泊施設が充実していることは過酷な状態で調査を行う場合非常に重要で、我々はすぐに元気を取り戻した。次の日、我々は検診場所に向けて夜明け前にホテルを出発した。夜明けと共に頂上辺りが白み始めたメルー山（海抜 4566m）を背に車を走らせているとその前を二頭のキリンが横切っていった。映画の一シーンの様な光景であり、躍動する野生動物を見た初めての瞬間であった。アフリカといえば至る所で野生動物を観察出来ると思われがちであるが、我々はダルエスサラームからハンデニを経由してアルーシャまで車で移動してきたが、その間一度も野生動物を見ることはなかった。

検診場所の途中までは舗装された快適な道であったが、ある地点からは埃のような細かい砂が堆積した場所を枯れ木を縫って走るため、前方の車との車間を取らないと前の車が巻き上げる砂埃のために前方が全く見えなくなる状態であった。このような状態であるので、砂埃が入らないように車の窓は閉めているが、どこからか砂埃が入り込んできて車内が埃だらけになった。

また、車を止めると、車の前方から大量の砂埃をかけられたように一瞬のうちに砂埃がフロントガラスを覆い、次の瞬間ガラス面に沿って滑り落ちていった。

マサイの検診を無事終え、アルーシャからダルエスサラームへは陸路だと二日はかかるので空路を利用した。

約一ヶ月の検診の過酷さを検診に使用したパジェロが如実に物語っていた。新車で検診に出発した車が検診が終わってダルエスサラームに帰ってきたときには車軸がゆがんでしまったのか外から見ると車が向かっている方向とは違う方向に向いているように見えるようになっていた。

2004 年に三度目の訪問をした。アメリカ大使館が爆破された 6 年前には日本の中古のディーゼル車が宿泊は〇〇旅館へ、ご用命は〇〇へ電話下さい等を書いたまま走り回っている状態であったが、今回は車の数が更に増え、車体は再塗装されていた。

今回は以前の調査とは別の目的で来たためダルエスサラームのみの滞在であった。町を歩いている子供の服装の違いに気付いた。以前は思い思いの服装をしていたが、今回皆同じような服装をしていた。現地の共同研究者に聞いたところ、八から九割の子供が学校に通っていて、制服を着ているとのことであった。我々が調査に行った場所の近くに日本から援助を受けて開設された学校があった。

タンザニアの経済の伸びは中国並みの年 7 から 8%だそうで、今後どのように社会が変貌するか楽しみである。

日本が援助した学校と生徒